

女學寶文庫





女大寺寶文庫

五
庫

女大寺寶文庫

天保十五年
 山泉屋
 山崎屋甚五郎

東都芝罘町三丁目十三番地

としふぢのぢく
 たのし
 ぶん

女大學

一 妻女子を成長して

他人乃家一切男姑

と伝ふそれ方の男

子よりも親の教養と

と願ふは父母寵愛

しとて忠と育ぬは

夫乃家よりゆくは

陸よりて夫より疎

男若海正あまは

くく思ひ男を恨罷り
中悪女なりき流まり
遁出され恥と申し次女
子に父母との割多れと
と謂てしと男は女悪

よく己がなりは誤あり
是清女子に親の教多れ
故なり
一女を容より元心若くは
身了と若くは心

流星羞女ハ心強敷眼
忍しく見出しく人を
怒りし系匄よ物のみ
さう形く口枕をく人よ先
立人と恨嫉之我身

誇り人と誇り羨ひ我人
よ情白なるハこれ女の道
に遠るなり女ハ心相さ
あさぐらひて貞信よ情ふ
う静なる誠淑しん

一女子の雅時より男女の
別と云くして儀初より元
戯まするを是閑志むるの
らに古の礼は男女を
席を回くさし衣裘を
え

おかしく處るに日一所
うく活き物と云ふは
活き奉りも子より子へ
よき教ゆくと云ふは必
福と云ひて終一人

をいふは及ぶと父母兄弟
少くも別と正しく正しく
と也々時の民家を以て
若法と名をけりて初親と
礼とくして石紙様一親

兄弟に辱せあつて一生身と
をいふは若くは口惜くも
事に行ふとや女を父母
の命と妹姉とふれとて
交らと親しく小学より

えきせりし能合殿と考ふ
と七心紙金石れくくま
堅くしき義とある下
一婦人を其の家のとつとの家
とすむ故よ唐土よハ婿と

ゆきしりし我家よ帰る
しりし也きしりし夫乃家
美味成と七夫と怨む
へりし天より我よ与た
ゆきし家れ美ハリと仕合

乃^ゆ出^いき^ゆ成^るる^しと思^ふひ一
度^い嫁^いし^てい^ま家^いと^いく
さ^かと女^め名^な乃^のと^まる^も
古^{いにし}の聖^{せい}人^{にん}の刺^さし^てる^る女^にれ
道^{みち}は消^き去^さる^ると^いふ^は一^い生^{せい}

の恥^はた^りり^しは^ま道^{みち}に^ま婦^ふ人^{にん}今^{いま}
七^{しち}去^さる^るて^は前^{まへ}は^まさ^に復^{かへ}七^{しち}あり
一^い中^{ちゆう}の^の嫌^{きら}ふ^る順^{じゆん}じ^うる^る女^にを^を
一^い度^い一^い二^によ^よハ^ハ子^こを^を死^し女^にハ^ハ去^さ
へ^へ一^い是^{これ}妻^{つま}と^いふ^は子^こ孫^{そん}お^お濟^す

乃為大それた道徳道々
婦人の心正しく以て能
く妬心なく去るも
曰姓若子と類ふ處一或
は妻に子に於て其子

如くとも去に及ぶは之は
淫乱なれば去はるは悟氣
深多れば去はるは癩病を
よの悪とて疾あはせは去る
なり多かるく情た

物ものいひ過すぎに親いん類れいも中ちゆう
何なにと成な家け礼れいものお
進まへに去さるに七しちにお物もの行ゆ
盗ぬすむ人あらむと去され七去さ
皆みな聖せい人にんのお教けうたらし女を一

度たび嫁よめしてその家けを出て進
むに候こう令れいあらむに比ひ留りう考こう
あらむ丈は嫁とも女にれた
小こ遠とほく大おのる辱たらし一
女に子こは我家がに有てを家

父母^{ふぼ}より孝^{こう}と云^いふ程^{ほど}
なりと云^いふ程^{ほど}を夫^{おつと}の家^{いへ}に
おろし^{おろ}す^す親^{おや}の
も重^{おも}く^くて厚^{あつ}き^きし^しみ
教^{おし}ひ^ひ孝^{こう}けい^{けい}と云^いふ^ふ親^{おや}の

方^{かた}と云^いふ^ふ男^{おとこ}の^の體^{てい}す^す
と云^いふ^ふ女^{めづ}の^の體^{てい}す^す乃^{すなは}ち^ち
夕^{ゆふ}の^の見^み存^{ぞん}と云^いふ^ふ親^{おや}の^の
方^{かた}乃^{すなは}ち^ち業^{わざ}を^を怠^{おろ}す^す
は若^{わか}姪^{ひめ}若^{わか}命^{いのち}の^の體^{てい}す^す

高き方づらば美しと常姑
小同くま教ふ仁一嬢
り一家を惜し能く考ま
ふ是怒恨る子勿道孝致
辱して激とりのそ法ふ

此は故をうぬに中好な
ふりれあり
一婦人の別よ之君あり
と主人とふい教懐く事
庵一将ぬ悔る一ひん

想しく婦人の及ぶ人よ
後少くありては、夫は對する
月顔色と兼は、い
魅惑と極し和順好
不忠よりして不順なるは、

尙奢く、吾はたるるに
是女子第一の勲なり、夫乃
教訓わはば、主と叛く
は、顔教と夫は、同
下知は、恥ありて、夫同

あつぱ正く養つて一を返
養味なるは母を礼也夫は
後之怒るもまの心違へ
昨ふ處一怒り淨じり
そ心よ送ふつては女を

夫とりのつて夫とははるも
夫に送てても若くはと種
うらむ

一見公女公ハ夫の兄弟なるれ
を致しつて夫の親類に

倚道惜多れ、男姑乃心
又省く我身、為子、良直
く、以、睦、く、其、其、嫌、乃
心、も、恟、又、媿、誠、親、み
携、者、正、一、神、父、父、の、足

一、嫌、妬、心、妬、心、教、は、
男、媿、乱、た、れ、を、疎、
怨、怨、一、以、妬、心、甚、一、乃、
一、嫌、妬、心、妬、心、教、は、
男、媿、乱、た、れ、を、疎、
怨、怨、一、以、妬、心、甚、一、乃、

ハニキ色と紫も白
冷くく都く丈に凍
見ゆく物おりの丈
不義はわく我の海とわ
あ夢を雅く凍地

凍地地はくく先物
心く後く丈を和く
時又凍く必色を暴
くく夢をく死くあて丈
年送り類く剣通

一言指を懐く多くはなうら
はへも人を逃し仍死
公うは人の情をすりた
らむ心小修多人は情
庵うは懐をいひ傳ふる

家の内活は
より親類も同無教あり
一女はよふ考ひしそを身と
堅く懐く懐く一物よく
去秋の逢く夜色ハ森正

一々家此門の事心成
用い織縫績洋布つ
はまも茶酒かど多く飲
つるに歌者妓小唄洋端
理本との流達する子成足

徒急の流宮馬おと物
人の多く集雨四十歳よ
り山は河もるゆくの流
一垂觀本との事心成
神仏と活し近付穰ふ物

つらむ口人るれ勤く
する時、務くはそも神
仙のまふべ

一人乃素成ていそ家と能
係つる一素のゆいあ

く放埒のまじぶ家と破る素
事候くく費と他く
に衣被飲食なるも身は分
限る所い用て奢とあるれ
一若こ時、父の親類友を下

初木の若き男小お解に
る物を付くは男女の
痛減意もく如何なる
用もく先若き男は又
と毎はくは

一 身は莊元衣裳の深藍色
換かとも目小身も怒や
にま下し身も衣服と
様はく深なるは
是く清と居く人の目

五ほどおろすを悪く只
の身に悪くを利し
一我に親の方より私一父の
乃親類と云ふをさうに
正月節句などにも先父

乃方親類より次は私親乃
乃親類より父の御方
何方より私親より人
は親類の御方より
一女を私親の家より續

舅姑の誼と進め来り我親
よりも嫁と大切より思ひ着
初と為し一嫁しと後
己が親れ家不ゆく事も毒
嫁し一増く化の家を大

飛を使と老りして善回と
為庵し一又家親にれ
しを修て攢るる一
一介初あまし一石住在可れ事
自奉方を忠つて勤

女の作法なり男姑の爲
よ夜とぬい合と調え
仕く初と思し席を掃
子成育汚道と洗ひ
家の内ふ居く穢よ外

出づのり流

一平女と法よよ心と用
云甲斐あるも一平福
魚くて智恵おしく心妍
物よふと祥なり支の

舅姑姨の子招我今
合ぬ事一何進ハ後ハ
算せしむれと却て
乃為思一里婦人
急おくしてあ進と佐

く必以恨し出来安一
来丈の家ハ礼化人
恨く叛ら思事と捨る
安一搦て下女の詞
く大切なる嫁姨
親

と落くまづうに家下女侍
造く多々くしてわが若
多れ子く造りて
の者いかに親類の中を
しい坊あ家と机を養心

なるもの心とて又年
その誠候よに命に合する
あーそれと怒罵て心
道を約し補綴する
く家の内静なるに悪

事わらばねむし教て誤
と重下一妙の道ハ思く思
るべし一法心乃内ハ一徳
外ハ一徳とくく一徳と
らぬ概は法ふ下一と重

一凡婦人の心概乃重よ病
用少老立ぬ若く概
多し毎の心
らむ但我事入るるて
べき事わらば材と情

ハ初に作らぬと想ひ恨
ると人と隣家との妬
心智恵清さなりけ
六名麻を十人よ七八
う形もあむ先婦人志

男に及ぶる雨之自
戒之改去一申も智
恵乃涉由名下大此疾も
殺る女陰性たう陰
教もく暗一所以女を

男に情を小悪く目撃
如家独りこゝも知
泣又人の悲しく事ごと
辨一は我史つらの子れ美
と成毎こゝも知る事

科そつ死人と怒り怒り
復世成り人と嫉憎て我
身福立人成心と人
憎是跡さく皆我も此
仇成とと知る事

たゞ清様一子と育進く
も堂下漏進くたうく
智恵一かく愚なるゆゑ小
河子も我身と薄く
丈二流庵一古乃法よ

女子と養を三日麻衣
下小所志むる空一り
先七男如天よ孝一
女身地よ象る故よ弟の
ふ系付く七丈城歩人五

我身わがみと後のちあり我わがたのむる
事ことに能あたりし事ことも捨する
心こころおろく亦また悪わるしとわが
人ひとよ、いふ事ことに違ちがへば
しままや早はやく過あやまちを改あらむまて

人に習まなぶ事ことは格かく下げ我わが
身みと殺ころす事ことは人ひとよ侮あはれ
る事こと後のちさうし横よこにあり能あたり
て物ものは心こころ違ちがへば
のころろふふ治ちああをを支しぬぬの中なか

自おのづからわあつしざゆいりすま未またまさまく
法はふ道どう添そひくか家い名な内うち様さま
ななりりななりり
右みぎ名な條じょうくく権けんささ時ときららるる
よよくく劑じななりりままささ書しよの

ああくく折せくく讀よみししめめるる
ととああののしし先せんよよ今いまのの代だい
若わか人ひと女よめ子こ月つき一いつ夜よ指さし道みち
具ぐななりり多おほく興かたまりくく婚よめ姻いんをを
ししむむるるよよううくく先せん法はふ條じょうくく

と能くあること一生を
保寶なること一終
人よく百萬錢と出
女子嫁きしむるを知
く十万錢と出て子

教ることを知はるる
識なるもの女子乃親
る人法理を知て人を知る
毎るに
女大學終

有一帖之貝原先生乃著述
一多不取之兒女乃多錢
備心之至寶在也今亦接
と改免之乎習ふ為し也
傳ふる。七十九なり

東都道病月町
天保十三之亥表
山泉堂 山泉堂 山泉堂 甚長傳梓

有一帖者貝原先生之著述
之小取云云 兒女之身
至寶本者 是今亦接
と年習ふ為し也 傳ふる
天保十三之亥表

東都道病月町
山泉堂 有
田村其治
長野縣信濃國
山泉堂 有
田村其治
山泉堂 有
田村其治

田村の巻

17